

Interview mit TN06 (12.07.2017)

Q : ドイツ語を教え始めたのはいつでしたっけ?いつ頃、いつから、何年でしたか?

A : 養成講座に私が参加したのって 2009 年からでしたよね?その年からなので、2009 年の 4 月からです。

Q : ドイツ語を教え始めるきっかけはどういうことでしたか?

A : キっかけはあの、まだ留学しているときに、指導教員から非常勤の話を受けたというのがきっかけです。

Q : それで、じゃあ 4 月から教え始めて、養成講座がその年の 9 月から、ということですね。最初教え始めた頃のことを思い出して頂きたいんですけども、こう教えることに関して自分は自分はどういうところは割と、比較的できると感じたり、あるいはどういうところが難しいと感じていましたか?

A : 最初その文法を教えてくださいってということで話を頂いたんですけど、できるというかちょっと質問の趣旨とずれるかもしれないんですけど、あんまり実はわたしはドイツ語を熱心に教えようというつもりはなくて、その時は。基本、研究者になるためにはドイツ語教員をしなければいなくて、その研究者として、教えるということには自分は興味はないけれども、食べていくための必要なこととして、教えるということが必要だというふうに最初は認識していて、ただ給料をもらう以上はきっちりやろうとも思っていた。その年っていえば一コマしかなかったんで、かなり準備にも時間をかけて、学生も顔と名前を憶えて一人ずつケアしてみたいなことはやっていたので、丁寧な授業っていうのはできているなど、自分では思っていました。で、ただやはり一番最初の年というのはベテランの先生に比べるとたぶんいろんなことが行き届かないんだろうなっていうふうに思ったことはあったんですけど。例えば授業の上手に説明するスキルだとか、例えばある項目に関して質問が出ても同じ説明しかできなくて結局わかってもらえなかったりとか、そういう同じ内容を多様な観点から説明するとか、そういうことはできないというふうに思っていました。あとできることはですね、わたし最初からけっこう時間管理はうまかったです。なので今日は 90 分でこの内容をしないといけないので、バランスよくこの項目とこの項目を配置してっていうことは割とできていて、予定通りには進んでいました。

Q : 専門はドイツ文学でしたと思うんですけど、そうするとじゃあ、当初は研究者としてやっていくためにドイツ語も教える必要があるという意識で教え始めた。で、その後そういうドイツ語を教えることについての意識っていうのは、なにか変化がありましたか?

A : それで、やってみたら学生がかわいくてしょうがなかったんですよ。それであの、かわいと思ったので教え方とか準備の仕方がすごく変わったわけではなかったんですけど、意識としては、教えることも一所懸命やろうというふうには変わりました。

Q：独文学会の教員養成・研修講座に参加しようと思ったのはなぜですか？

A：もともと所属していた学科で、ドイツ語教授法の集中講義があったんですね。就職に有利になるようにって思って、取ったんですよ。その集中講義があった直後に一年半ほど留学したんですけど、ちょうどその、留学中は当然行けないので、帰ってきたタイミングがその2009年だったので、もともと留学をするっていうか、++先生の出た時に次のタイミングで取ろうっていうのは決めてたんですね。それは直接、非常勤をしたということとは関係ないんです、取ったきっかけっていうのは。なので、++先生の集中講義が、面白かったっていうのが、まあきっかけなんですけど。その集中講義ってよその学科の方がきてたんですね、二人。法学部と社会学科の人。独文科じゃない人が二人いて、けっこうその、**の独文科っていうところはそういう時に他の人を交えてワイワイ話すっていうのはない学科なんですけど、そういう人たちを交えたディスカッションというのがすごく盛り上がり、その集中講義では、わりとそのあとの打ち上げとかそういうものでも仲良くなれて、一人とは今でも実はやりとりをしているんですけど、それが自分としては新鮮な集中講義で、ほかの学科の人たちと仲良くなれた、でその授業中もそういう人たちがちゃんと活発に議論ができる土壌があったっていうのがすごく自分では新鮮で。その人たちがその知らない人たちの中に入っても臆せず議論ができる人たちだったっていうのはあると思いますけど、やっぱりそれは授業運営が良かったんだろうと思って、もちろん++先生のお人柄もあると思うんですけど、それ以上にその人をちゃんと平等にしゃべらせるとか、そのためにMoodleをつかって感想を毎日投稿してたんですけど、それを取り上げて次の日の授業を始めるとか、そういうMoodleっていうテクニックを使うとか、授業の進め方として最初に前の日のレスポンスをするとか、そういう技術的な面っていうのがあって、そういういい雰囲気っていうのが作れたんだろうと思ったんですね。なので養成講座みたいなところにいったら、なかなか教員であるわたし自身の人格とかは変えられないと思うんですけど、ある意味、技術の部分でその参加しやすい授業を作り出せるテクニックが学べるんじゃないかなっていうふうにその時には思いました。なので、養成講座もやっぱりその受講することによって、就職に有利に働かせようっていう気持ちはもちろんあったんですけど、それと同時にやっぱり、人とうまく話せる、学生同士がうまく話せたりする環境を作れるテクニックを学びたいっていうのがありました。

Q：なるほど。じゃあそういうことを期待して参加を決めた。その期待は満たされたか、実際に。

A：そうですね。正直なこと言うと、受けた結果、自分が授業運営がうまくなったかっていうと、それはなんか、ここは劇的に変わってっていうところはないんですね。で、まあただ、どうなのかな、満たされたのかな。ただ、やっぱりその、ドイツ語ではないんですけど、レスポンスを必ずする、だからドイツ語でも小テストをしたら返して、点をつけるだけじゃなくて必ず返して振り返りをするとか、あるいはその、ドイツ語

の授業じゃなくて文学系の授業であっても、毎回コメントシートを出してもらって、それに対してレスポンスをするし、学生が発表するときも次の回にコメントになおしてレスポンスさせるとか、そういうことっていうのは多分、養成講座をしたのでできていることかなって思います。

Q：逆に養成講座で勉強したけれども、実際にはなかなかうまくいかなかったりとか、あまり役立たなかったりということとか、そういうこともあれば、ぜひどうぞ。

A：大きい話も何だと思うんですけど、カリキュラム作りとか、そういうのはやっぱりなかなかその、自分が、なんでしょう、その自分の授業の運営以外に学校全体の、大学全体の授業のあり方を決められる役職に就いていないので、そういうのに関してはなかなか発言する機会がないですね。大学全体を、あるいは学科全体を、そういうカリキュラムっていうのは4年間を見つめたうえで大事で、4年間の私の場合であれば教養教育と専門教育の中で、どういうふうに第二外国語を位置づけていってかという理念は大事だと思うんですけど、そういうところに至っていないので、そこについてはやっぱり生かしていないかなっていうのと、あとはちょっと養成講座の場合はコミュニケーションの重視っていうのが偏りすぎかなっていうのは個人的に思っていて、やっぱり実際には文法をっていうので授業をするようになっていうのは求められますし、学生の方でも必ずしもドイツへ行ってドイツ語を話す人ばかりではないので、専門分野の論文を読みたいとか、本が好きでドイツ語の文学も読んでみたいっていうような需要が一定数あって、習ったけど生かせないっていうよりは、その辺はあまり習わなかったと思うので、その辺はちょっと養成講座が生かせなかった部分ではありますね。

Q：なにかビリーフが変わったことってありますか？昔はこう思ってたけど、こう考えるようになったとか。

A：養成講座を通じてっていうことですよ。

Q：養成講座を通じてでもいいですし、昔と今と比べて、こういうことをきっかけにこういう風に考えが変わったっていうことがあれば、それでもいいです。

A：養成講座は間接的にかかわっていると思うんですけど、やっぱり昔はわたし全部説明しようとしていて、わからなかったら、日本語で言葉を尽くしてすごく説明するっていうことを、それはドイツ語に限らずわりとなんでもやっちゃってしまってたんですけど、その分授業の中で、実践に割く時間が少なかったんですね最初の頃って。なんですけど、直接のきっかけは、授業がうまくいかなかった年があります。一クラスに70人以上いて、その中にはモチベーションが低い人もいる。50人ぐらいまでならどうにかなっていたんですけど、70人ぐらいになって、ちょっとなんか学級崩壊じゃないですけど、全然誰も聞いてないみたいな状況になっちゃった年があったんですね。やっぱりその時はなんかその、学生が多かったので練習問題とかで当ててやらせるのをしなかった、ということと、当てたとしても学期に一人一回とかしか回らなかったと思うんですけど、それまではテストを毎回返してたんですけど、それを返すのに時間がかかっちゃ

うので、採点はするけど返すのはやめたっていうのがあって、そこがやっぱり、今まではその採点をしたものを返すとか、授業中に当てるとかっていうのを自分はそんなに大事に思っていなかったんですけど、大事なんだなっていうことがわかったというのと、あと**学科と++学科で授業を持ってるんですけど、++学科の人ってわりと理屈をこねるのが好きなんです。文法はこういう理由でこうなっていますとか、こうなっているからこんなことが分かりますとか、枠構造がどうか、そういう話をすごい喜んで聞いてくれるんですけど、**科の人ってあまり理屈に興味なくて、ただうまく行かなかった中でも、++学科の人が覚えてないようなかなり細かいことを覚えている人が何人かいる、っていうのを採点していて気づいたんですね。とにかく記憶力がいいので、説明してわかるよりは覚えるのが好き、もちろんステレオタイプ化しすぎてはいけないけど、そういう傾向が強いのかなっていうのは気が付いて。なのでその次の年から同じ文法の授業でも**科の方は説明をなるべく少なくするようにして、こういう言い方をしたら怒られそうですけど、来週はこれをテストに出すので今からこれを覚えましょう、みたいなのに変えてみたら、すごく喜んで **der des dem den** みたいなのをやってるんですよ。すみません例がながくなってしまったんですけど、同じことを教える時にも学生の集団の傾向によって、教え方っていうのは変えないといけないんだなっていうのを、その時にすごいわかりました。

Q：教え始めた最初の頃と比べて、教師としての今の自分を評価するとしたら、どのように見られますか？今のご自分を。

A：どうなんだろう。でも、もちろん技術的にはよくなったと思うんですけど、ただ教員としてよくなったかっていうと、それは微妙なところもあって、今は前に比べてコマ数もすごく多いので、一人一人の学生のことを、顔と名前を覚えて、どんな人かわかってっていうのが、昔ほどはやってないんですね。なので一年目に教えた学生と違って今でも一人ひとり覚えてるんですけど、今教えている学生は、次の年になったら忘れちゃうし。それは忙しすぎて自分が体調を崩してしまったりしたこともあって、この2年ぐらい、授業については、手抜きをしようってんではないんですけど、力抜けるところは抜こうと思ったっていうところはあるので、やる気がなくなったばかりではないんですけど、ただやっぱりその、なので前と比べると技術的にはやらなくていいことには力を割かなくなったっていう点は評価できると思いますけど。実際にやっぱり人として、一人一人の生徒との関係っていうのを考えた時には、ある意味プロフェッショナルな分、希薄になったっていうのはあるなあというふうに思います。ある年に、名前を覚えることをやめてみたんですけど、別にそれで学生の成績とかが下がったわけではなかったんですけど、別のそれで学生の成績とかが下がったわけではなかったんですけど、人の顔を覚えるのがすごく苦手なので、そこにそそぐエネルギーが莫大なんですけど、そこにエネルギーを割くのをやめました。それが成績という点ではそんなに関係がなかったとしても、学生生活を支えるっていう点ではそこがマイナスではあるだろうなと思います。

Q：昔よりうまくできるようになったこと、今はちょっと挙げられましたけど、ほかにはなにかありますか？

A：そうですね、いらぬことに力を注がないっていうのは、説明の点でもそうなので、今までは言葉を尽くして説明しようとしていたところを、例文を使って説明する、みたいなことをするようになったので、短い時間で効率的な授業っていうのは多分できるようになっていると思います。

Q：逆にここがまだ今一つなので、これからもっと伸ばしたいというような点がありますか？

A：教員個人としてっていうよりはやっぱりその、大学の第二外国語のシステムがあまりよくないので、その点はうまくどうにかしたいなとは思ってます。

Q：教員としてはなにか？

A：教員としては、どうなんだろうな。実際には、自分は文法訳読的な教え方っていうのが今でも中心になっている部分はやっぱりあると思うので、それでいい部分もあると思うんですけど個人的には、教授法っていうのをやられている方を見ると、技術ってやっぱりどんどん進歩していて、それはインターネットが発達するとかそういう意味で進歩していて、そういうものにきちんとキャッチアップされている方っていうのがほんとにたくさんいらっしゃるんで、自分でも新しい技術とか新しい教授法とか、そういうものをもっと積極的に取り入れていけるようになりたいとは思いますが。

Q：そのためにはなにか、具体的にどうしようという、なにか考えはありますか？

A：ドイツ語教育部会にも入ってはいるので、いろいろ講座がありますよね。そういうのにはなるべく出ようとは思っているんですけど。

Q：教員養成講座からは、そういう自己発展のための刺激とかは何か受けることはできましたか？

A：それはもちろん、刺激を受けた結果、こうその、自己発展というものに十分な時間と労力を割けているかっていうと、それはちょっと疑問はありますが、ただやっぱり、一番学んだことってその技術、ドイツ語の授業をさせるテクノロジーも、それから教え方もやっぱり日々進歩していて、ちゃんとキャッチアップして自分の授業のやり方を変えていかないといけないんだなっていうことが、すごくよく分かったんですね。だからやっぱりその、実際にはできないとしても、そうほんとはしないといけないけど限界がある、でも限界があってもちょっとはやりますよね。ていうのと、やっぱりそういうのを知らないで、自分が最初にやった授業だったり、受けた授業だったりのやり方をずっとやり続けるっていうのは、まあ、違うと思うので。そういうのがあるっていうことがわかったっていうのが、よかったかなと思いますし、あと私の代は* *さんが中心になって学会発表をしたりとか、そういうこともしたので、その学会発表をしたメンバーって今でも仲が良くて、学会で会ったら++さんとかとも飲みに行ったりしているので、養成講座の良かった点ということになるかと思いますが、文

学研究だけやっていたのでは知り合わなかったような人たちと、仲良くなれて、もちろんドイツ語の授業という点でもそうなんですけど、言語学をやっていたり教授法をやっていたりする人たちというのは、研究法っていうのが文学の人とは違うので、そういう人たちと日常的に接していくことができたっていうのは、講座自体というよりは、講座の中で気づいた人間関係によるものなんですけど、受けて良かった点かなとは思っています。

Q：最後に二つ質問があるんですけど、将来的な目線で、今後こういう授業ができるようになりたいっていうビジョンとか、そういうのはありますか？

A：私やっぱりこの、すごくよくできる学生はどんどんついてきて、二年三年やってくれう場合もあるんですけど、そういう人たちはすごく少数派で、わりとあんまりできない人っていうのが脱落していくんですね、私の授業って。私よりやり方ゆるいけど、脱落しないでみんなついてくるっていう授業をしていらっしゃる先生もいるので、もうちょっといろんなレベルの人がどうしても人数の中に入ってくるんですけど、できる人は伸ばすとしても、できない人に合わせてレベルを落とすのではなくて、脱落しないですむ方法っていうのはあるんじゃないかなと、そういう授業ができるようにありたいなと、すごい壮大な理想ですけど。あとは、四技能というのをまんべんなく伸ばせているかっていうとそうではないので、そこはやっぱりもうちょっとその工夫をして、メインは今のようにするとしても、会話とかやりたいっていう学生はいるんですけど、なかなか私に対応できなくて。なのでもうちょっと学生のニーズっていうものをきちんと発掘して、それに合わせた授業っていうのはできるようになりたいなっていうのはあります。

Q：あと最後の質問は、教師像なんですけど、これも未来、将来に向けてなんですけど、ドイツ語教師としての自分の未来像とか、あるいはこういう教師でありたいとか、理想の教師像とか、そういったビジョンはなにかありますか？

A：ドイツ語に限らず、特に教養のドイツ語とかだと専門の勉強がたくさんある中で、何十コマ取るうちの一コマに過ぎないわけですけど、そういう中でやっぱり、振り返ってみたときに、この授業取って良かったなって思えるような授業ができる先生にはなりたかなと、思います。

Q：補足したいことがあれば。

A：すぐにできることではないんですが、こういうのになりたいなと思ってもそれが整えられる制度がないということが残念です。大学のカリキュラムもあまり第二外国語には理解がない人たちが大枠を決めていたり、そういうところはよくあるので、第二外国語の教員同士がもうちょっと連帯していくようなことができるといいのかなっていうのは思いますし、私の状況では非常勤の先生たちとの連絡がうまく取れていないので、なかなか私よりも長くずっと非常勤をされていて、ずっと**大にいらっしゃるような方だと、そもそもどういう授業をされているのかっていう情報がほとんど入ってこ

ないし、たまに入ってきたとしても、こうしてくださいとは言えなかったりするんですよね。言いたいことっていうより、大学のシステムの問題、まずはそうですね、やっぱりたくさんの大学である問題だと思うんですね。なかなかやっぱり、理想を言っても制度っていうのが整わないと実現できないので、制度を整わせられるような形での、養成講座とかでも情報交換をするときに具体的な授業の情報交換をしますが、なかなかそういうことまでは至らない時があるので、そういう点をなんかちょっとその、考えていけるような場っていうのはあるといいかなとは思っています。